

一枚の木の葉

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。

ヨハネの手紙一 4章 16節（日本聖書協会・新共同訳）

一枚の木の葉が、強烈なインスピレーションを与えてくれたことがある。何の変哲もない桜の葉だった。人は何のために生きるのか、だれもが抱くような疑問に取り憑かれて悶々としていた。高校2年の頃だった。列車通学をしていたが、降りるべき駅で降りずに数駅後で降車し、河原で1日やり過ごすこともしばしばだった。河原では表題に「無」がつくものを手当たり次第に読んでいた。たとえばサルトルの「存在と無」。読んでも、ちんぷんかんぷんだったが、何かがあるかもしれないという期待だけが、歯が立ちそうもない本にかじりつかせていた。

ある日列車は、とある田舎の駅に停車していた。田舎の駅に桜の木はよく似合う。よくある光景だ。古木が多く1本1本に風格がある。もう桜の季節も終わっていた。花が散れば、古木もみずみずしい葉でよそおわれる。

その日もぼんやりと外を見ていた。今日は学校に行こうか、河原ですごそうか。そんなわたしになぜか一枚の葉っぱが、圧倒的な存在感をもって迫ってきたのだ。時折風にそよぐ一枚の桜葉—自分は今何のために生きているかわからなくなって悶々としている。でも、静かに風にそよいでいるこの一枚の葉の、何と軽やかなこと。インスピレーションがわたしをとらえたのは、そう思った瞬間であった。とどまっている。何か大きな大きな命にとどまっている。だからこそ、一枚の木の葉も、こんなにも軽やかなのだ。風とたわむれ、ま

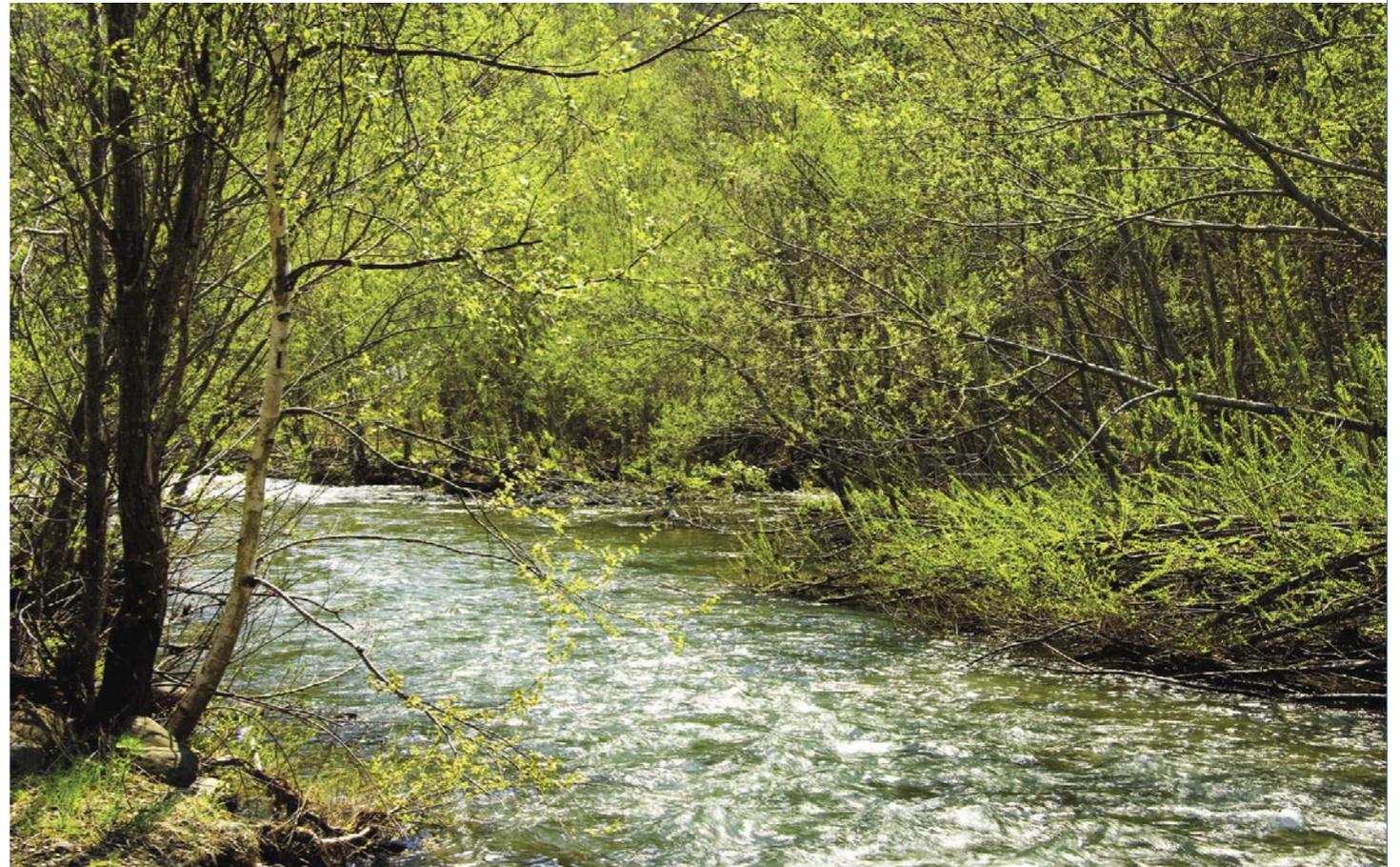
た静まり、また風とたわむれる。大きな大きな命がある。すべての存在の背後に大きな命がある。そのひらめきは、わたしを全宇宙を理解したかのような気分にさえしてくれた。人間が混沌としているのは、自分がとどまる場所を知らないからではないのか。人は前に前に進もうとする。人は更に更に超えていこうとする。人は高く高く伸びようとする。でもなぜそうするのかは知らない。

考えてみれば、自然のことをオノズカラシカリと書く。天然自然という言葉もある。これは天の然り、自ずから然りという意味ではないか。何か大きな命にとどまっていて、その然りをうけてそこにあるもの、それが風にそよぐ一枚の葉なのだ。むしろそのときはここまで整理して考えたわけではない。インスピレーションで、これらのすべてを感じ取っただけだった。

そのときまた、世界史の授業でならった、キリスト教徒の殉教者たちのことが心に浮かんだ。彼らも何かにとどまり続けて喜んで死んでいった。獅子の餌にされて死んでいった。何か自分を超えた大きな大きな存在を知っていたのだ。

その日は、高揚した気分で、授業に出た。休み時間に友達をつかまえて、一気にそのインスピレーションを語ったが、友達はきょとんとしていた。帰りに、中学校の側にあった小さな教会を訪ねてみようか決意していた。

k. S



(写真：重富克彦)

